



# ペトラルカ研究

近藤恒一 著



創文社

近藤 恒一 (こんどう・つねいち)

1930 年高知県に生まれる。53 年、広島大学文学部哲学科卒業。58 年、同大学大学院文学研究科博士課程修了。61-67 年、ポーロニア大学留学。79-80 年、フィレンツェ大学留学。ポーロニア大学講師、大分大学助教授をへて、現在、東京学芸大学教授。

〔著訳書〕「イタリア哲学」(『哲学研究大系 3』所収、共著)、「ルネサンスにおける自我」(『自我』所収)、エウジェニオ・ガレン『ヨーロッパの教育—ルネサンスとヒューマニズム』。

〔ペトラルカ研究〕

|     |                    |           |                                                                                   |          |             |            |                |                      |         |
|-----|--------------------|-----------|-----------------------------------------------------------------------------------|----------|-------------|------------|----------------|----------------------|---------|
| 発行所 | 東京都千代田区<br>一番町一七番地 | 株式<br>創文社 |  | 著者 近藤 恒一 | 発行者 久保井 理津男 | 印刷者 中内 康 児 | 東京都文京区関口一―二四―八 | 昭和五九年三月二十五日<br>第一刷発行 | 定価六八〇〇円 |
|     |                    |           |                                                                                   |          |             |            |                |                      |         |

晩印刷・鈴木製本

3010-170460-4226

## まえがき

フランチェスコ・ペトラルカは、偉大な詩人として著名である。叙事詩人ダンテ、散文家ボッカッチョとならんで、抒情詩人ペトラルカの名は、イタリア文学の三巨星の一つをなしている。いな、イタリアのみならず全ヨーロッパにおける抒情詩の最高峰の一つをなしている。これは久しく文学史の常識となってきたところである。しかし、思想家としてのペトラルカは、それほど人びとの関心をひかなかった。したがって、哲学史家によるペトラルカ研究は、欧米においても比較的なおざりにされてきた。もちろん、断片的なものとしては、すぐれた研究も少なくない。が、まとまった研究となると、文学史家の努力にゆだねられてきたのが実情である。

わが国でも、哲学的思想家としてのペトラルカは、ほとんど評価されていない。ただ、人文主義者として重要な人物であったという、いささかあいまいな評価がなされてきたにすぎない。これにはそれなりの歴史的理由もあったのである。

まず第一に、わが国におけるイタリア哲学研究の立ちおくれという一般的事情があった。これはおもに、明治以前の近代化のモデルが英・米・独・仏という先進四か国であったことによる。じつさい、欧米にたいする知識人の関心も、この四か国に集中していた。哲学研究者たちの関心もむろん例外ではなかった。そしてある時期からは、ドイツ哲学への関心が哲学界の主流となった。こうした一般的状況のもとでは、イタリア哲学への関心は低調であらざるをえなかったのである。これに加えて、ルネサンス哲学そのものへの無関心という一般的事情があった。久しくドイツ観念論の強い影響下にあったわが国哲学界においては、偉大な体系を欠くルネサンス哲

学は、ほとんど無視されざるをえなかったのである。

このように、わが国におけるイタリア哲学研究の一般的立ちおくれ。ルネサンス哲学そのものへの関心の低さ。この二要因の相乗作用によって、イタリア・ルネサンス哲学への関心は、まことに貧弱なものにとどまった。本格的研究がはじまったのは、やっと戦後になってからである。

ところで、ルネサンス哲学軽視の主要原因となったもの、つまり、ルネサンス哲学の根本的弱点とみなされたもの。それこそじつは、ルネサンス哲学の基本的特質の一つ、魅力の一つをなすものである。このことはとくにペトラルカの場合にあてはまる。

一三世紀と一七世紀という偉大な体系の時代には生まれたルネサンス期は、哲学体系という観点からみれば、おびただしい群小哲学者たちの活躍した時代であった。かれらのうちひとりとして、トマスやデカルトやスピノザに比肩しうるような体系的構築をなした者はいない。いな、かれらの多くは、体系と呼べるようなものすらもたなかった。ところが、これはしばしば、かれらの自覚的に企図するところでもあったのである。じっさい、かれらは意図的に、スコラ哲学の「大全」という論理的叙述形式をしりぞけ、親しい人間どうしのあいだでの語りかけという叙述形式をとった。つまり、書簡体や対話体という形式をとった。このような叙述形式を流行させるうえに決定的役割を演じたのは、ほかならぬペトラルカだったのである。

ペトラルカにみられる、書簡体や対話体の愛好と、体系化の拒否。この両者はむろん深く結びついていた。哲学的探究と人間的交わりの深化とを一体化するという根本的発想と要求に、両者はともに根ざしていたのである。体系化拒否をただ体系化の能力の欠如から生じた単なる結果にすぎないと解したのでは、かれの哲学的探究を内奥からつきうごかしていた深い要求とその意義とを、まったく見のがしてしまうことになろう。そしてまた、一

般にルネサンス哲学の「弱点」と一体をなしているその長所や魅力をも見のがしてしまふことになる。

ベトラルカのような思想家、そして一般にルネサンス期の思想家を、哲学思想研究という立場から正当に評価するには、従来とはちがった視点が必要であろう。

まず、体系的な視点を捨てなければならない。さらにまた、これと結びついた一つの哲学観をも捨てなければならない。すなわち、哲学固有の問題領域と論理的叙述形式という二面から哲学的探究をきびしく限定し、哲学と他の諸学とを峻別すべきだとする考えである。こうした考えからすれば、たとえば哲学と文学とは、同じく人間と世界を問題にし、世界における人間のありかたや生きかたを問題にするとしても、叙述形式を異にするゆえに峻別されなければならないことになる。哲学と歴史もしかりである。ところが、ルネサンスの哲学的思想家たち、なかんずくヒューマニストたちが追究したのは、これとは逆のことであった。かれらは、あらゆる関心を人間に収斂させ、人間とその生きかたの問題を追究すること自体に何よりも重きをおいた。そして、この問題の追究そのものをつうじて、諸学の境界線をとりはらってしまったのである。いな、むしろ積極的に、人間の問題を核として諸学を結びつけようとさえした。そこから、一つの総合的な「人間の学」としてフマニタス研究の理念がうまれたのである。さらには、同じく人間の問題を核として、自然の諸学をも含むいっさいの学芸を統一しようとする百科全書的理念さえうまれるにいたったのである。

このように、かれらのもとめた学は、少なくとも理念的には、人間の問題を統一核とする総合的な学であった。しかし、そこでの統一や総合は、けっして閉鎖的な体系化を意味するものではなかった。むしろ逆で、この総合的な学は、その統一核にむかって収斂するとともに、つねに開かれた学であった。つまり、人間とかかわりのあるかぎりのいっさいの学芸にむかって開かれていたのである。そして結局のところ、この天地の間に、人間とま

まったく無関係なものは何ひとつないと思なされていたのである。

このような開かれた学の理念をもちつつ関心を人間に集中させていた哲学的思想家たち、なかんずくペトルカのようなヒューマニストは、前述の体系主義やこれと結びついた哲学観からすれば、哲学者とはみなされにくい。事実、ヒューマニストたちはたいいてい、哲学的思想家としてではなく、あるいは文学者として、あるいは歴史家や「文法学者」として、一定の評価を受けてきたにすぎないのである。だが、こうした見かたから解放されないかぎり、ペトルカのような人物を哲学的思想家として正當に評価することはむずかしいであろう。じつさい、かれは自覺的に、人間の問題を中心として哲学と、文学や歴史とを統一しようとしたのである。それは要するに哲学と文学との統一であった。かれが叙述形式として書簡体や對話体を好んだのは、このことも深く結びついていたのである。

いきいきとした生感覚や具体感覚にめぐまれていたペトルカにとっては、哲学的探究はつねに、人間の生、自己の生に密着したものでなければならなかった。それは基本的に、実践的・倫理的性格のものでなければならず、切実な生の問題をめぐってなされる、自己自身および他者との對話であった。自己のうちに深まるとともに、他者との人間的交わりを深めることであった。その意味で、かれの膨大な書簡集は、そのつどの「親近な」具体的問題をめぐって友人や知人たちに親しく語りかけつつなされた、誠実な哲学的実践の記録だともいえる。

哲学的探究というものを基本的にこのようなものと考えたペトルカは、体系的思想家ではありえなかった。むしろ、そのときどきの具体的状況における具体的問題へのとりくみをつうじて思索し、著作する。したがって、かれの思想は、多かれ少なかれ断片的に表明されざるをえなかった。断片的とはいえ、しかし、かれのテーマも考えかたも、その生涯をつうじて一貫して執拗に追究されているように思われる。

本書の第一部は、そのようなペトラルカのほぼ前半生をとりあつかっている。すなわち、かれの教養や思想の形成過程を具体的にあとづけ、かれの思想の基本的立場や方向をあきらかにしようとしている。したがって、もちろん、かれの思想の全貌をとらえようとするものではない。かれの思想的立場としてのヒューマンイズムについて、より内容豊かな包括的研究をするためには、かれの後半生における思想活動をも考察しなければならない。じっさい、かれのほぼ前半生をヒューマンイズムの形成期とすれば、後半生はその展開期といえるのである。

本書の第二部は、この展開期を研究し、かれの広範多岐にわたる思想活動の主要局面のいくつかに焦点を合わせて考察している。したがって第二部も、かれの思想についての包括的な研究とはいえない。じっさい、ここで取りあげられなかったペトラルカ独自の諸テーマのうちには、重要なものも少なくない。その一つ「孤独」の問題については、私はすでに二篇の論文を公けにしているが、本書の構成上、ここに収めるのを断念せざるをえなかった。第二部の諸論文は、一見ばらばらのようにみえるかもしれないが、そのじつ一貫して、かれの思想的・文化的活動をその内部からつきうごかしていた根本的諸動機をとりだし、それを掘りさげ、浮彫りさせることをめざしている。したがって、見かけの非体系性にもかかわらず、内容的には緊密につながっているはずである。ペトラルカのように、自分の思想の体系的構築には関心がなく、そのときどきの切実な具体的問題へのとりくみをつうじて、あるいはまた時代批判にみられるようにそのときどきの論争をつうじて、そのつど、だが一貫して執拗に、自分の思想を掘りさげたり表明したりする思想家。そのような思想家を理解しようとする試みとしては、このような研究も、それなりの存在理由をもつのではないかと思う。

このように、本書の第一部はむしろのこと第二部も、包括的なペトラルカ思想の研究とはいえない。しかし、本書全体としては、かなり包括的な研究となっているはずである。

なお、本書において私のとった基本的研究態度と方法をあきらかにしておくのも、著者としての義務とおもわれる。

本書において私が第一に心がけたのは、ペトルルカ自身の著作にもとづいて、その内部から、かれの思想を理解することであつた。ほかならぬペトルルカ自身が古代作家たちとのあいだでおこなつたような「対話」を、かれ自身とのあいだで試みることであつた。こうした態度と方法によつてのみ、ある思想家とその思想を、いきいきと現前させうると信じたからである。哲学思想の研究においてこのような態度をとるのは、ごく当然のことである。ことさらに改めて書きたてるほどのことではないと思われるかもしれない。が、私のこの研究態度は、わが国におけるイタリア・ルネサンス研究にみられたある傾向についての批判的反省ともかわりがあるのである。

従来、とくに戦前、わが国におけるイタリア・ルネサンス研究は、あまりにも西洋のルネサンス研究に依存していた感がある。少なくとも、西洋の膨大な研究成果にふりまわされ、あるいはその重圧にあえぐ、という一面があつたのは事実である。じつさい、おびたしい新旧の研究書や研究論文、多様な新旧の研究動向や解釈に直面して、それらについての理解や紹介の労に疲れ、ともすれば、自分自身の目でじかに一次資料にとりくむ努力がなおざりにされがちであつた。あるいは、そのような努力をするだけの余裕がなかったともいえよう。こうしてルネサンス研究は、ときとして欧米の研究書にもとづく間接的研究となり、あるいはまた、ルネサンス研究というよりはむしろ、ルネサンス研究の研究となつていた。もちろん、このような傾向が日本のルネサンス研究を隅々まで支配していたわけではない。このような傾向にたいする明確な批判的反省もみられた。が、前述のような傾向がかなり広くゆきわたつていたことも否定できない。思想研究においても、この傾向は顕著であつた。そしてこれには、それなりの理由があつたのである。

戦前、わが国におけるイタリア・ルネサンス哲学の研究は、いわば片手間におこなわれてきた。すでに述べたように、久しく哲學家たちのあいだでは、イタリア・ルネサンス哲学への関心は皆無に近いものであった。したがって、たまに研究らしいものがみられたとしても、一般哲学史研究の一部としてルネサンス哲学が論じられるにすぎなかった。あるいはまた、隣接諸分野における専門的ルネサンス研究者、たとえば歴史家や文学史家や美術史家により、各自の専門的研究との関連において、いくらか哲学思想が論じられるにすぎなかった。が、いずれの場合にも、イタリア・ルネサンス哲学への本格的とりくみは望むべくもなかった。こういうわけで、ルネサンス哲學者たち自身の著作にもとづいて、かれらを、かれらの思想を、じかにその内側から理解しようとする努力は、ほとんど見られないままだったのである。本格的研究がはじまったのは、ようやく戦後になってからである。

このようなルネサンス研究の歴史を自覚的に受けとめつつ、私がペトルルカ研究においてまず心がけたのは、かれ自身との「対話」ということだったのである。

一般に「対話」というものは、それが深まれば深まるほど、その対話の主体を変革していくものである。私たちが、いわばおのれをむなしくして、ある思想家のうちに深くはいりこんでいけばいくほど、その思想家は私たちにたいして、絶えず新しい「顔」と内実を示し、いわばみずからを変えていく。そのことによってまた、私たち自身も変えられていく。深い交わりとしての真の「対話」は、私たちにたいして自己変革的にはたらくのである。そして、私たちが無意識のうちにおちいりがちな自己の固定化や絶対化を、ときとして根底から否定していく。だからこそ、本質的な意味で実り豊かなのである。そのような「対話」を自覚化していくことは、根本的に「自覚の学」である哲学を研究する者にとっては、とくに重要であらう。だから私は、あるべきであった方法論

の有効性や切れ味をしめすための思想研究といったものには、あまり信をおかない。そのような研究は、たいてい無意識のうちに、その方法論の依拠する自己の立場を、したがってまた自己自身を絶対視していて、自己変革的ではない。せいぜい、その方法をきたえなおし、より有効なものにするくらいであろう。だが、探究の手段としての方法論は、たとえどのようにきたえあげられようとも、さきのような「対話」の精神にささえられないかぎり、けっして真に豊かな成果をもたらすはしないであろう。

本書における私の研究態度と方法は前述のとおりであるが、このことはなにも、私が欧米の研究成果に負うところ少ないということの意味するものではない。むしろ逆である。ことに、第一部の第二章、第三章、第五章、第二部の第四章などでは、欧米の研究成果、なかならず文献学的研究成果に、ほぼ全面的に依拠している部分も少なくない。註にあげた数々の研究書や研究論文が、何よりもそのことを証拠だてている。とはいえ私は、ペトルカ研究の歴史を批判的に整理し、この批判的作業を介して、私自身のペトルカ研究の視点や問題設定を導きだすという、いわば研究者として当然の仕事を、はじめから意識的に放棄してきた。これはひとえに、そのような仕事にあまりにもエネルギーをとられて、ペトルカ研究であるべきものがペトルカ研究の研究に終わりはしないかをおそれたからである。じっさい、西洋におけるペトルカ研究の伝統はルネサンス期にまでさかのぼり、数世紀間にわたる研究の成果は、気の遠くなるような膨大な量にのぼるのである。

もちろん、ペトルカ研究についての反省的研究も、ルネサンス研究についてのそれと同様、それなりの重要な意義と価値をもっている。このことを私は、いささかも否定するつもりはない。が、とにかく私自身は、前述のような研究態度と方法を自覚的にこころがけたのである。とはいえ本書は、いま述べたとおり、欧米の研究成果に多くを負っている。そのことを私は、だれよりも自覚しているつもりである。が、同時にまた、本書はやは

り私自身のものだと思っている。そしてまた、私なりの「対話」の独自の成果もそこに含まれていることを信じてい。

多年にわたる私のペトルカ研究は、その成果の大部分が、いま本書に見るとおりの姿でまとめられるにいった。この成果が、いかにささやかなものであれ、わが国における主体的なルネサンス思想研究の今後に、いくらかでも寄与しうればさいわいである。



## 引用原典表

本書に引用するペトラルカ原典とその版、および略記号は、下記のとおりである。

- Afr.*            *Africa*, edizione critica per cura di N. Festa, Firenze 1926.
- Buc. carm.*    *Bucolicum carmen*, in *Il Bucolicum Carmen e i suoi commenti inediti*, a cura di A. Avena, Padova 1906 (ristampa anastatica, Bologna 1969).
- Coll. laur.*    *Collatio laureationis*, in *Opere latine* di Francesco Petrarca, a cura di A. Bufano, Torino 1975, pp. 1255-83.
- Contra eum*    *Invectiva contra eum qui maledixit Italie*, in *Opere latine cit.*, pp. 1153-1253.
- Contra med.*   *Invective contra medicum*, a cura di P. G. Ricci, Roma 1950.
- Contra quend.* *Invectiva contra quendam magni status hominem sed nullius scientie aut virtutis*, in *Opere latine cit.*, pp. 983-1023.
- Fam.*           *Familiarium rerum libri*, ed. critica per cura di V. Rossi e U. Bosco, 4 voll., Firenze 1933-42.
- Ignor.*        *De sui ipsius et multorum ignorantia*, in *Opere latine cit.*, pp. 1025-1151.
- Metr.*         *Epistolae metricae*, in Francisci Petrarchae ..... *Opera quae extant omnia*....., Basileae 1554 (reprinted ed., Ridgewood, New Jersey, 1965).\*
- Ot. rel.*       *De otio religioso*, a cura di G. Rotondi, Città del Vaticano 1958.
- Post.*          *Posteritati*, in Francesco Petrarca: *Prose*, a cura di G. Martellotti e di P. G. Ricci - E. Carrara - E. Bianchi, Milano-Napoli 1955, pp. 1-19.
- Psalm. penit.* *Psalmi penitentiales*, in Pétrarque: *Les psaumes pénitentiaux*, publiés d'après le manuscrit de la Bibliothèque de Lucerne par Henry Cochin, Paris 1929.
- Remed.*       *De remediis utriusque fortunae*, in *Opera omnia cit.*\*\*
- Rer. mem.*    *Rerum memorandarum libri*, ed. critica per cura di Gius. Billanovich, Firenze 1945.
- Rime*          *Rerum vulgarium fragmenta* (= *Rime sparse* = *Canzoniere*), in Francesco Petrarca: *Canzoniere*. Testo critico e introduzione di Gianfranco Contini, Torino 1972.
- Secr.*         *Secretum* (= *De secreto conflictu curarum mearum*), in *Prose cit.*, pp. 21-215.

- Sen.* *Senilium rerum libri*, in *Opera omnia* cit.\*\*\*
- Sine nom.* *Liber sine nomine*, in Paul Piur: *Petrarcas 'Buch ohne Namen' und die Päpstliche Kurie*, pp. 161-238, Halle 1925, pp. 161-238.
- Test.* *Testamentum*, in *Opere latine* cit., pp. 1341-57.
- Tr.* *Triumphhi (Trionfi)*, in Francesco Petrarca: *Rime, Trionfi e poesie latine*, a cura di F. Neri - G. Martellotti - E. Bianchi - N. Sapegno, Milano-Napoli 1951, pp. 479-578.
- Tr. Cupid.* *Triumphus Cupidinis.*
- Tr. Pudic.* *Triumphus Pudicitie.*
- Tr. Mort.* *Triumphus Mortis.*
- Tr. Fame* *Triumphus Fame.*
- Tr. Temp.* *Triumphus Temporis.*
- Tr. Etern.* *Triumphus Eternitatis.*
- Var.* *Epistolae variae*, in Francisci Petrarcae *Epistolae de rebus familiaribus et variae*, ed. Gius. Fracassetti, Firenze 1859-63, vol. III, pp. 309-488.
- Vir. ill.* *De viris illustribus*, ed. critica per cura di G. Martellotti, vol. I, Firenze 1964.
- Vita sol.* *De vita solitaria*, in *Prose* cit., pp. 285-591.

\* *Epistolae metricae* の韻文書簡のうち、つぎのペトラルカ選集に収録されているものは、これらの校訂版によって読む。

*Rime, Trionfi e poesie latine* cit., pp. 705-805.

*Opere* di Francesco Petrarca, a cura di E. Bigi, Milano 1963, 1975<sup>5</sup>, pp. 393-491.

なお、これらの選集に収録されていない韻文書簡については、つぎの版を参照する。

Francischi Petrarcae *Poëmata minora quae extant omnia nunc primo ad trutinam revocata ac recensita*, ed. D. Rossetti, Milano 1829-34, voll. II, III.

\*\* *De remediis utriusque fortunae* の諸対話篇のうち、つぎの版に収録されているものは、これらの版によって読む。

*Prose* cit., pp. 605-645.

Francesco Petrarca, *De remediis utriusque fortunae*. Zweisprachige Ausgabe in Auswahl, übersetzt und kommentiert von R. Schottlaender, München 1975.

\*\*\* *Senilium rerum libri* の書簡のうち、つぎの選集に収録されているものは、これらの校訂版によって読む。

*Prose* cit., pp. 1027-1159.

*Opere* cit., pp. 885-969.

*Epistole* di Francesco Petrarca, a cura di U. Dotti, Torino 1978.

この『老年書簡集』(*Sen.*)の巻番号と書簡番号の表示は、*Opera omnia* のそれによらず、ここに一般に採用されているそれによった。それはつぎの手引書で採用されているものと同じである。

E. H. Wilkins, *Petrarch's Correspondence*, Padova 1960.

なお、本書の引用訳文中の……は著者による省略をあらわし、〔 〕内は著者による補足である。傍点も著者。

# 目次

|                           |       |
|---------------------------|-------|
| まえがき                      | i     |
| 引用原典表                     | xviii |
| 序 論 「歴史なきペトラルカ」とペトラルカの歴史  | 六     |
| 一 ヒューマニズムの父(一)            |       |
| 二 「歴史なきペトラルカ」(五)          |       |
| 三 「歴史なきペトラルカ」とペトラルカの歴史(八) |       |
| 四 根本資料(二三)                |       |
| 第一部 ペトラルカにおけるヒューマニズムの形成   |       |
| 第一章 少年期の教養形成(二三〇—四二〇)     | 七     |
| 第一節 おいたち                  | 七     |
| 第二節 最初の学習                 | 三     |
| 第三節 キケロとの出会い              | 六     |
| 第四節 モンペリエ遊学               | 一〇    |
| 第五節 無常感                   | 一三    |
| 第二章 ボローニア遊学(四二二—四二六)      | 一六    |
| 第一節 ボローニア遊学の「三か年」         | 一六    |

|                                              |                                          |                   |
|----------------------------------------------|------------------------------------------|-------------------|
| 一 精神の糧をもとめて (二〇六)                            | 二 人間的対話をもとめて (二〇〇)                       | 三 歴史的使命感 (二二)     |
| 第五節 「文学的」工房——結びにかえて                          | 二五                                       |                   |
| 第五章 ヒューマニズムの成立——「愛読書」目録とその意味するもの             | 二九                                       |                   |
| 第一節 「愛読書」目録                                  | 二九                                       |                   |
| 一 「わが愛読書」(Libri mei peculiare) (二九)          | 二 目録の作成時期 (三三)                           |                   |
| 三 目録の見出しの意味するもの (三九)                         |                                          |                   |
| 第二節 「愛読書」目録の構成と内容                            | 三六                                       |                   |
| 一 目録全体の構成 (三六)                               | 二 「世俗文学」(三九)                             | 三 「宗教文学」(二九)      |
| 第三節 「愛読書」目録の意味するもの                           | 四                                        |                   |
| 一 古典主義 (四四)                                  | 二 原典志向 (四四)                              | 三 ラテノ文学と俗語文学 (四六) |
| 四 古典文学と宗教文学 (四六)                             |                                          |                   |
| 第四節 ヒューマニズムの成立——結びにかえて                       | 四六                                       |                   |
| 第六章 キリスト教的ヒューマニズム                            | 四五                                       |                   |
| 第一節 宗教文学への接近                                 | 四五                                       |                   |
| 第二節 古典文化とキリスト教との統一                           | 五七                                       |                   |
| 第三節 古典的ローマとキリスト教的ローマとの統一                     | 六三                                       |                   |
| 一 ローマの「再発見」(六三)                              | 二 古典的ローマ「再生」のために——史書『著名人伝』と叙事詩『アフリカ』(六六) |                   |
| 三 キリスト教的ローマ「再生」のために——教皇庁のローマ帰還(六七)           |                                          |                   |
| 四 古典的ローマとキリスト教的ローマとの統一——聖俗両世界の中心としてのローマ (八四) |                                          |                   |